

昭和57年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その3概報

つち はし
土 橋 遺 跡

— 第 2 次 調 査 —

— 1 9 8 3. 3 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

昭和57年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その3概報

つち はし
土 橋 遺 跡

— 第 2 次 調 査 —

— 1 9 8 3. 3 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

序 文

土橋遺跡は、袋井市名栗北原川で調査が進められております坂尻遺跡とともに、一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）建設に伴う緊急発掘調査であります。今回の調査に先立って行われた第1次調査で用地内における土橋遺跡の面積は、18,500㎡と確定されました。発掘調査はこれを受けて行われ、弥生時代から近世、近代にいたる遺構群6,000㎡の調査を終了しました。

土橋遺跡は太田川左岸の肥沃な水田地帯の中央に位置し、北方には徳光、鶴松、鶴田遺跡など弥生時代の大集落跡が帯状に連なり、袋井市の稲作文化発祥の地に所在しています。東方の丘陵には、方形周溝墓や古墳が多く分布し、こうした遺跡群を中心として栄えた古代文化を想わせます。周囲の自然堤防など微高地上の小径は、古くからのものが多く、道端に残る道標にも交通路としての重要性が指摘できます。また、遺跡の南方に望む木原の集落には戦国時代の木原畷や江戸時代の松並木が残り、歴史に果たしてきた地域の役割を感じさせずにはおれません。

袋井市の豊かな自然の中に歴史事象が融けこみ、歴史的景観をつくってきたのです。正岡子規が車窓から見た袋井市としての特色ある景観は、地方都市のいずれもがそうでありますように、近年の急速な開発によって失われつつあります。自然景観と共に歴史的景観は一度失えば再び元に戻すには至難の技です。遺跡の破壊も同じことではないかと思われます。発掘調査を行い、報告書を刊行すれば事足れりではなく、その歴史の重みを感じとることが大切なことではないでしょうか。自然景観と歴史的景観、文化と文化財は、私たちが次代に残し得る最大の贈物ではないかと思います。

猛暑の中、寒風吹き荒ぶ中、発掘調査に従事して頂いた作業員、補助員の方々、静岡県教育委員会文化課、建設省浜松工事事務所、関係各位のご尽力に感謝申し上げます。

袋 井 市 教 育 委 員 会

教育長 鈴 木 勲 一

例 言

1. 本書は昭和57年9月21日から昭和58年3月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その3概報（土橋遺跡第2次調査）である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、寺田義昭、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 現地調査は対象面積が広いため11の区画に分けて調査員が次のように分担しこれを寺田が指導した。第2次調査における各区画の主担当者は下記のとおりである。
寺田義昭・山本宏司……1区、4区、5区
寺田義昭・松井一明……3区
寺田義昭・永井義博……2区、6区
5. 資料整理は寺田の指導をうけて、山本、松井、永井が行った。
6. 本文の執筆・編集は永井が行った。
7. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。（敬称略）
松井一明（袋井市教育委員会）
山本宏司（土橋遺跡調査員）
渡辺菊男、大橋庄一、川島良一、大庭嘉平、佐藤好孝、鈴木嘉三郎、大庭千代子、大庭泰子、鈴木喜代子、寺田すぎ、大庭つや子、鈴木栄子、白井洋子、鈴木直子、寺田妙子、内山笑子、友田みさ子、寺田しま子、内山夏代子、大庭はつゑ、鈴木好子、寺田なか、太田馬仔雄、高野由美子、森永明美、鈴木利枝、大庭京子、早川保子、浅井征江、寺田せつ子、寺田ひで子
ここに記して深く感謝の意を表したい。
8. 本調査にあたって次の方々の協力を得た。（敬称略）
五島康司、吉岡伸夫、前田庄一、兼子弘美、高木真澄、西尾玲子
磐田市立郷土館、焼津市埋蔵文化財調査事務所、静岡市立登呂博物館、浜松市立博物館
9. 調査資料はすべて袋井市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 地理的環境・歴史的環境	1
第3節 発掘調査の経過	4
第4節 調 査 の 方 法	4
第2章 遺 跡	5
第1節 遺 構	5
第2節 遺 物	14
第3章 ま と め	17

挿 図 目 次

第1図	太田川中流域主要遺跡分布図	巻頭
第2図	土橋遺跡発掘調査区画図	2
第3図	1区平面実測図	5
第4図	2区平面実測図	6
第5図	3区平面実測図	6
第6図	4区平面実測図	8
第7図	5区平面実測図	10
第8図	6区平面実測図	12
第9図	Pit390 出土土器（その1）	14
第10図	Pit390 出土土器（その2）	15
第11図	Pit390 出土土器（その3）	16
第12図	S K13出土着柄二又鍬	17

図 版 目 次

- 図版 1 土橋遺跡遠景（磐田原台地より）
土橋遺跡遠景（国道 1 号線より）
- 図版 2 1 区完掘写真（西より）
1 区 S D 22 完掘写真
- 図版 3 2 区完掘写真（東より）
2 区完掘写真（西より）
- 図版 4 2 区 S B 1 掘立柱建物遺構（南より）
2 区 S B 1 の Pit 2 完掘写真
- 図版 5 2 区 S D 4、S D 8 完掘写真
2 区 S D 7 完掘写真
- 図版 6 2 区 S D 29、S D 21、S D 3、S D 2、S D 5 完掘写真
2 区 S B 2 掘立柱建物遺構（南より）
- 図版 7 3 区完掘写真（西より）
3 区完掘写真（東より）
- 図版 8 3 区 S I 1、S I 2、S I 3、S D 32 等重複状況
3 区 S I 4 遺物出土状態
- 図版 9 3 区 S I 3 着柄鍬の柄出土
3 区 S I 2 遺物出土状態
- 図版 10 3 区 S B 4 完掘写真
3 区 S B 3 完掘写真
- 図版 11 2 区 S K 3 遺物出土状態
3 区 S K 3 土層堆積状態
- 図版 12 4 区完掘写真（東より）
4 区中央完掘写真
- 図版 13 4 区 S D 39 完掘写真
4 区 S D 45 完掘写真
- 図版 14 4 区西側 S D 44 周辺完掘写真
4 区 S K 13 完掘写真
- 図版 15 4 区 S K 9 遺物出土状態
4 区土壇完掘写真
- 図版 16 5 区完掘写真（東より）
5 区完掘写真（西より）

- 図版17 5区SK14、Pit185 完掘写真
5区SK15、遺物出土状態
- 図版18 6区完掘写真（北より）
6区完掘写真（西より）
- 図版19 6区SX1 完掘写真
6区SX1 内拡大写真
- 図版20 6区SX1 底面出土犬遺体検出状態
6区SX1 出土木製品
- 図版21 6区SK28（北より）
6区SK24（北より）
- 図版22 6区SD60（北より）
6区SD51（東より）
- 図版23 Pit390 出土遺物（1～6）
- 図版24 Pit390 出土遺物（7～12）
- 図版25 出土遺物（13～20）
- 図版26 出土遺物（21～24）

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

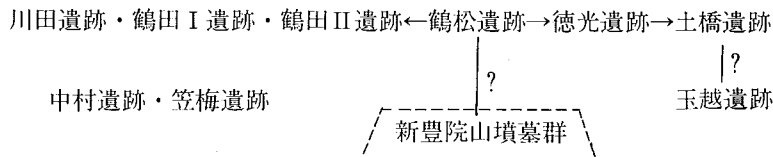
今回の調査に先行して実施された土橋遺跡第1次調査により土橋遺跡の性格について、そのおおまかな概要を知るに至った。このあたりについては『昭和57年度1般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その2報告書—土橋遺跡1次調査—』で詳しく述べられているのでそれを参照されたい。土橋遺跡第2次調査は、このように袋井バイパスの磐田—東名高速道路袋井インターチェンジ間の早期開通をめざすため大至急に取りかかることとなった。そこで57年度中に第1区～第6区までを調査し、翌58年度に7区～11区を調査することとし、未だ買収のおこなわれていない堀越の経済連前については追って協議することとした。これによって福山通運西側については58年度中にすべての現地調査を予定どおり終了し、福山通運東側についても59年度初旬に現地調査を完了し『土橋遺跡発掘調査報告書』を59年度末までに刊行しこれによって土橋遺跡に関するすべての事業を完了する予定となっている。

第2節 地理的環境・歴史的環境

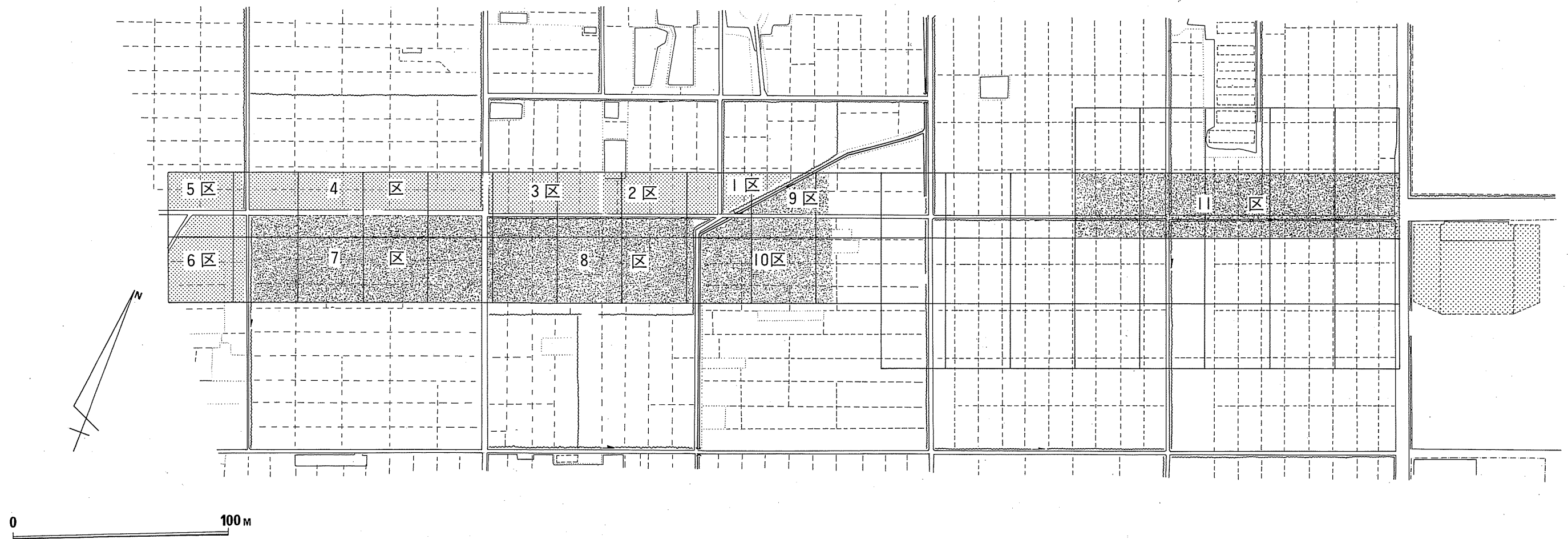
土橋遺跡は、東海道本線袋井駅より北西へ2kmに広がる水田地帯のほぼまん中に位置している。遺跡の西側1kmには太田川がその河道を横たえ、この平野の形成過程を私たちに教えてくれている。遺跡の西限となる蟹田川は、この太田川の自然堤防の東側に広がる後背湿地の水を集めて下流へ流す役目を果たしている。バイパス用地がこの蟹田川をこえるあたりは「ソブ池」と呼ばれる小さな沼と「錦四郎が淵」と呼ばれる旧蟹田川の流路があったが、いまでは昔話として古老によって語り継がれるのみで、わずかにヨシの繁る低湿地がその痕跡を残している。

歴史的環境については『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書—土橋遺跡第1次調査—』に詳しいのでここではその概要のみを述べたい。

この谷底平野の微高地上に広がる遺跡群は、



というように考えられている。このほか磐田原台地側には竹内原1号墓、権現山遺跡、下原遺跡、東原遺跡、権現下遺跡、竹之内原遺跡が、また宇刈丘陵側には一色前田遺跡、春岡1号墓など関連遺跡が散在している。



第2図 土橋遺跡発掘調査区画図

第3節 発掘調査の経過

9～12月

第2区から開始された発掘調査は東から順を追って3区、4区、5区、と続けられた。これらの地区はすべて用地中央に残された農道の北側である。2区、3区はある程度の広さがあるため重機により耕作土のみを掘削し遺構上面より遺構精査を行う。溝状遺構は深いものは人の背丈ほどもあり排土に苦勞する。遺物の中には古式の土師器から奈良末～平安にかけての墨書土器も含まれており重要な遺構である。検出された Pit のなかで、SB1、SB2、など掘立柱建物跡となるものもある。4区、5区は東西に細長い地区で、重機が入れないため最初から作業員により排土を行った。ここでは数ヶ所最終面が礫層になっており旧河道があったと推定されるが、遺構がこの礫層の中からも検出されることから弥生時代以前の河道の一つであろう。4区は遺構の集中が密であるが、5区はかなり希薄になり土橋遺跡の西側の範囲はこれによって十分証明されると思われる。

1～3月

磐田用水より西側の農道北側のメドをつけるため第1区に入る。ここでは中世の溝状遺構が3本検出されるが全体的に遺物量は少ない。続いて第6区の調査を開始するが、ここは茶畑となっており厚さ1m以上の盛り土が残っており重機により排土を行う。第6区の西側は竹ヤブをはさんで昔「ソブ池」と呼ばれた沼地になっており遺構確認で検出された溝跡もすべて西側へ流れ込んでいる。この時期は遠州地方特有の強い西風が1日中吹きまくり、また早朝は厚く張った氷に悩まされながらの調査であった。また6区中央には予想外の大きな池状遺構(SX1)があり、さらにはこの中から木製品や犬遺体が出土するという事態となった。犬遺体については他の用件で偶然来袋中の早稲田大学の金子浩昌先生に見ていただくことができた。

第4節 発掘調査の方法

今回の調査でも水田耕作土部分は重機により排土し、その後作業員により発掘調査を実施するという方法をとった。用地内の農道についても地元で現在使用中であり、簡単に取りはずすことができず、また隣地との境界付近も水田のくずれや水漏れを防止するためかなりの面積を残念ながら発掘できなかった。調査区は重機による耕作土掘削後は周囲に排水用の幅50cm、深さ50cmで溝を掘り、また水田部分や用水に接するところはコンパネにより土止めをして万全を期した。調査区西側と東側の端には集水枡を設置して自動の排水ポンプを入れ24時間作動するようにした。これにより土橋遺跡は水田の中の低湿地遺跡ながら周辺とは隔離された一般の遺跡とほぼ同じ状況で調査をすることができた。また、たいへん広い面積で長い距離で土砂を移動させるためベルトコンベアーを多数用意し可能な限り機械化をはかった。しかし最終的には調査員の能力とともに作業員の発掘技術及び基礎知識の量が作業能率を左右するため、できる限り現地での学習の機会を多くとるように心がけた。

第2章 遺 跡

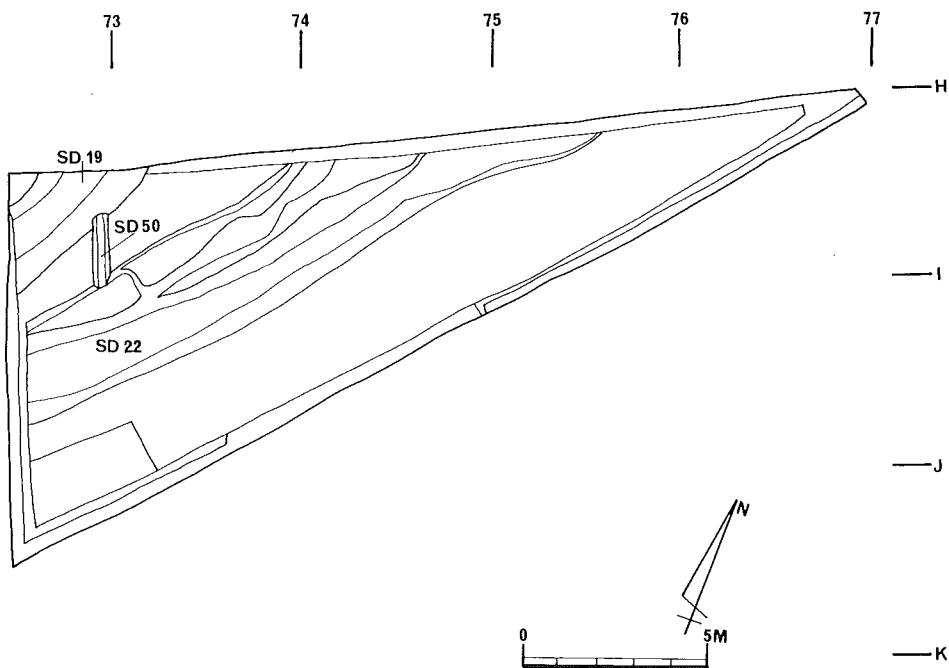
第1節 遺 構

(a) 1 区

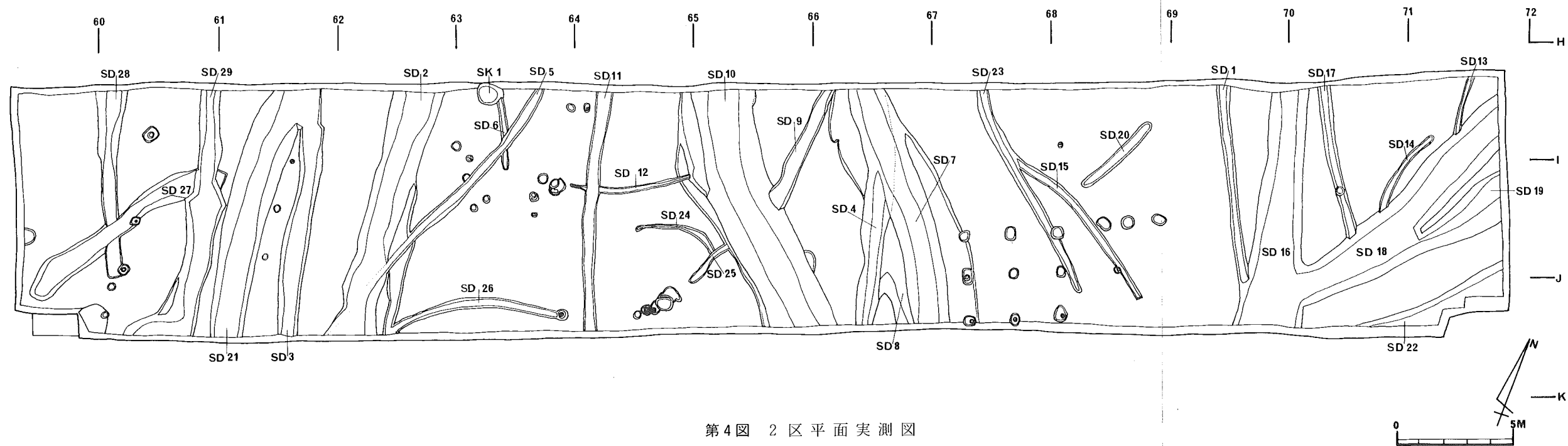
1区は磐田用水と農道に挟まれた三角形の約120㎡の面積をもつ発掘調査区である。この調査区は2区から5区までの調査が終了後に発掘された区画で3本の溝状遺構が検出されている。このうちSD19とSD20は平行して北東に主軸を向けているがSD50はこの二本の溝状遺構と重なっている。SD19は幅3m、深さ70cmで調査区隅に約3mほど確認されているが、2区でもこの溝状遺構は確認されており、それにつながるものと思われる。SD22は幅2m、深さ50cmで1区の中央で検出されており、2区の東南コーナーでもこのSD22が確認されている。

(b) 2 区

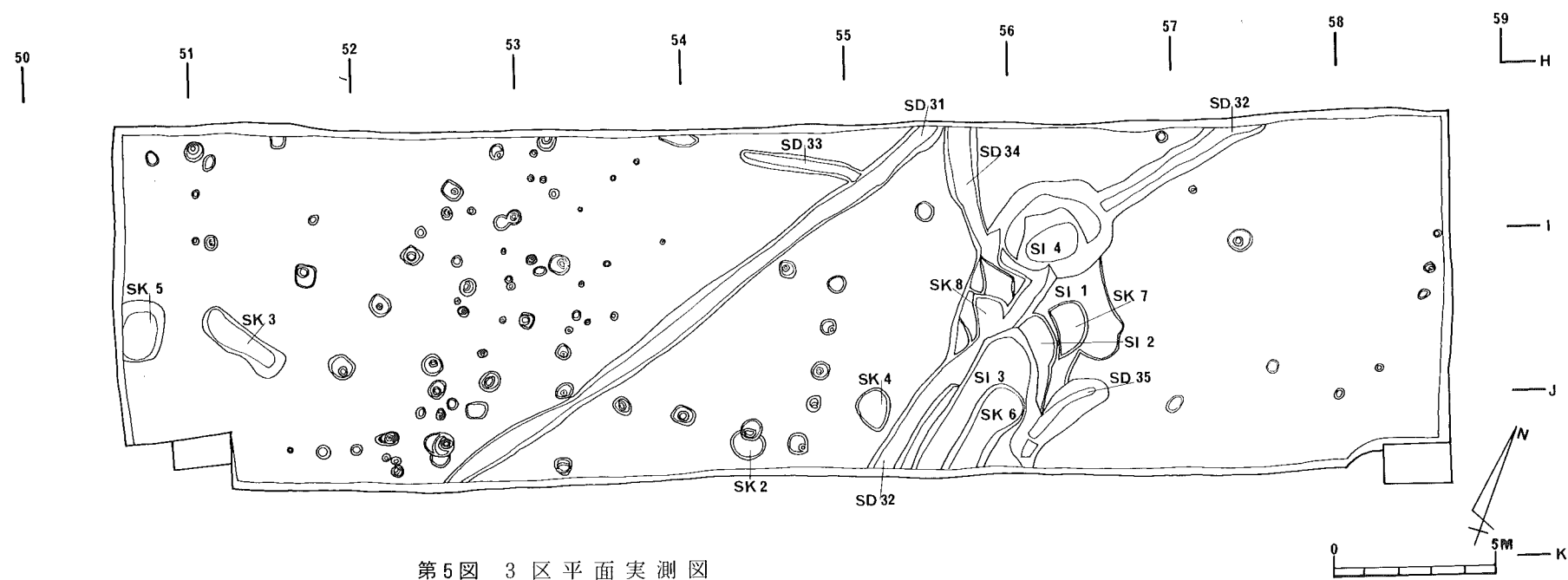
土橋・熊野神社の南側の約850㎡の発掘調査区である。東側を農道、西側を用水が通っているためこのように区切らざるをえなかった。この地区では溝状遺構を中心に土壇、Pitなどが散在している。主な遺構としては掘立柱建物跡SB1がある。その他溝状遺構は南北方向に主軸をとるものが多いが、69ラインより東側では中・近世の遺構が多い。このうち、SD1のみ古式土師器を出土する溝跡である。65～67ライン周辺は、弥生、古墳時代初頭、奈良末～平安時代の3本の溝状遺構が重複しておりSD4では墨書土器を含む良好な資料を出土している。



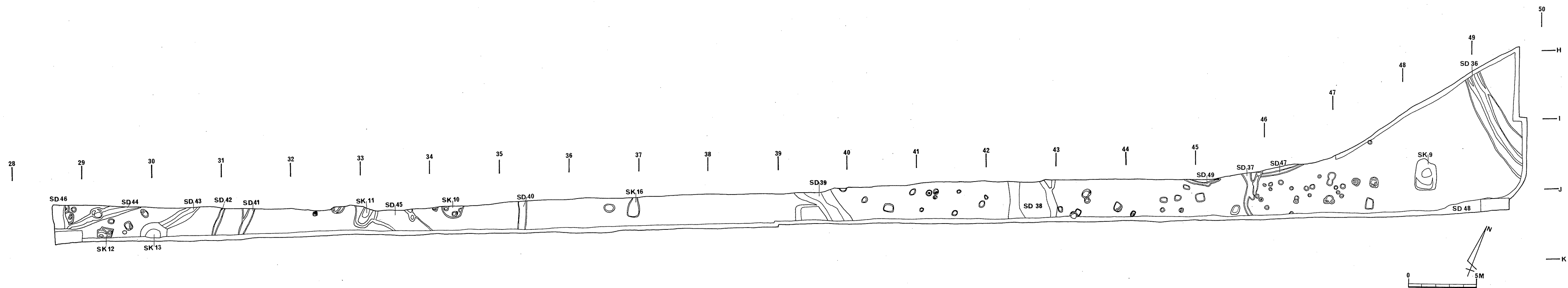
第3図 1区平面実測図



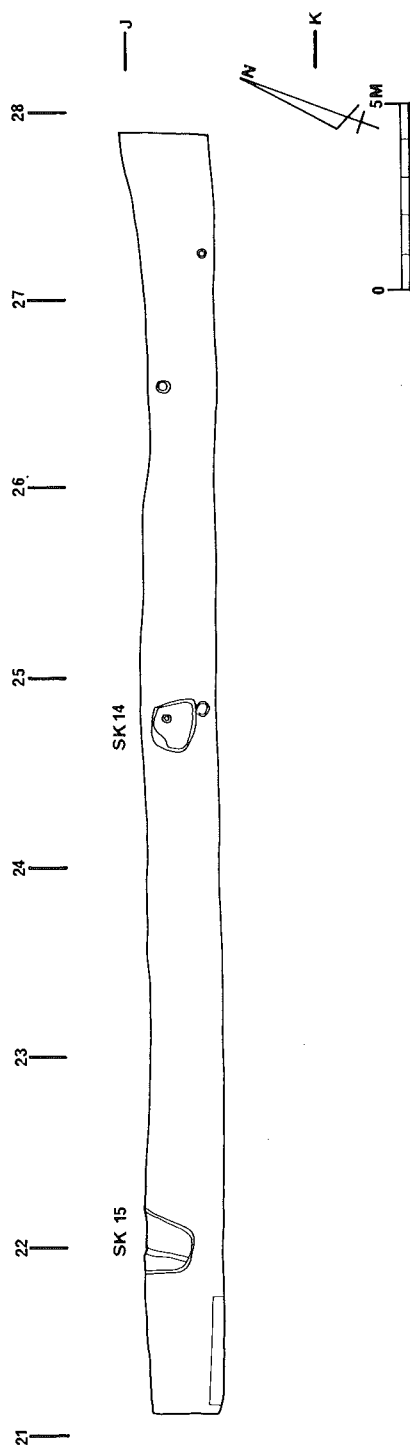
第4图 2区平面实测图



第5图 3区平面实测图



第6图 4区平面实测图



第7图 5区平面实测图

(c) 3 区

2区西側の約500㎡の発掘調査区である。この地区では溝状遺構と不定形土壌、Pit 群が検出されている。主な掘立柱建物跡はS B 3、S B 4などであるが、その他多数の Pit があり特に西側に集中している。またS I 4、S K 3等多量の土器が一括して埋められており、特に弥生時代後期から古墳時代の初頭にかけての遺物が出土している。55～57ラインにかけては南側へ続く溝状遺構が集中しているが、8区の調査によってこの遺構の性格は明らかになるであろう。

(d) 4 区

調査区西側の農道北側に細長く区画された調査区である。東西105m、南北3m で東側が用地の関係で広がっている。遺構は溝状遺構、Pit、土壌などがあるが、なにしろ調査区が細長いためにほとんどの遺構の性格が不明である。調査区東側の47ライン以東では最終遺構面がジャリ層となっており旧河道とおもわれる。S D 38、S D 39は弥生時代後期の菊川式の土器を出土する溝状遺構で南側の7区の調査が待たれる。S K 13は深さ1.5m の井戸状の遺構で½が南側の農道の下に入ってしまったが土師器や木製品(二叉鍬)を出土している。

(e) 5 区

土橋遺跡でいちばん西の調査区である。農道北側に細長く調査されているが遺構は土壌とPit が若干あるだけである。S K 14、S K 15とも弥生土器片を出土するがその絶対量は少ない。また最終遺構面は砂質を帯びており、6区西側の砂層、礫層の形成とも関係しているように思われる。

(f) 6 区

5区と同じ土橋遺跡のいちばん西の調査区である。6区内は東から砂質粘土層、砂層、礫層と最終遺構面の土層は変化しており、西端では遺構はほとんどない。河川の氾濫により堆積したと思われる礫層が流れ込んでいいる。遺構は大きな池状の遺構のS X 1をはじめ溝状遺構、土壌Pit などが検出されている。S X 1は直径12m、深さ1.6m の池状遺構で北側の直径4m、深さ1.4m の小さな井戸状の遺構とセットになっており、この2つは深さ50cm の溝状遺構で結ばれている。この溝状遺構の底部には3本の杭が水の流れを抑止するように打ち込まれている。大きな池状遺構からは湧水はないが、小さな井戸状の遺構からは水中ポンプを回しつづけなければいけないほどで、この遺構から池状遺構へ水を導びいていたと考えている。その他、S X 1の東側にもう1つ井戸状の遺構S K 24が、また木製の柱を残す土壌S K 28が調査区やや西寄りから検出されている。

(g) 7 区

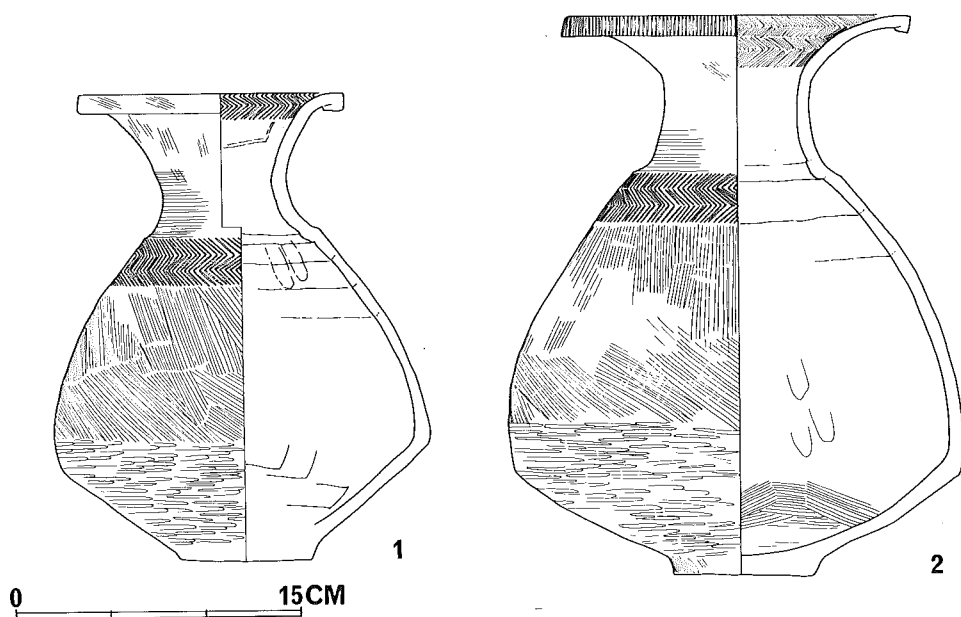
この調査区は現在途中まで調査を行っているが、溝状遺構、土壌、井戸状遺構、Pit 群など完掘していないものが多いため次回の報告書によって7区発掘調査完了の平面図を示したい。

以上のように今年度調査分の概略を述べてきたが、遺構としては想定していた弥生時代の遺構(住居跡、墓跡)は比較的少なく、古墳時代初頭の遺構(土壌、溝状遺構、Pit)や奈良末～平安時代の遺構が中心となってきている。

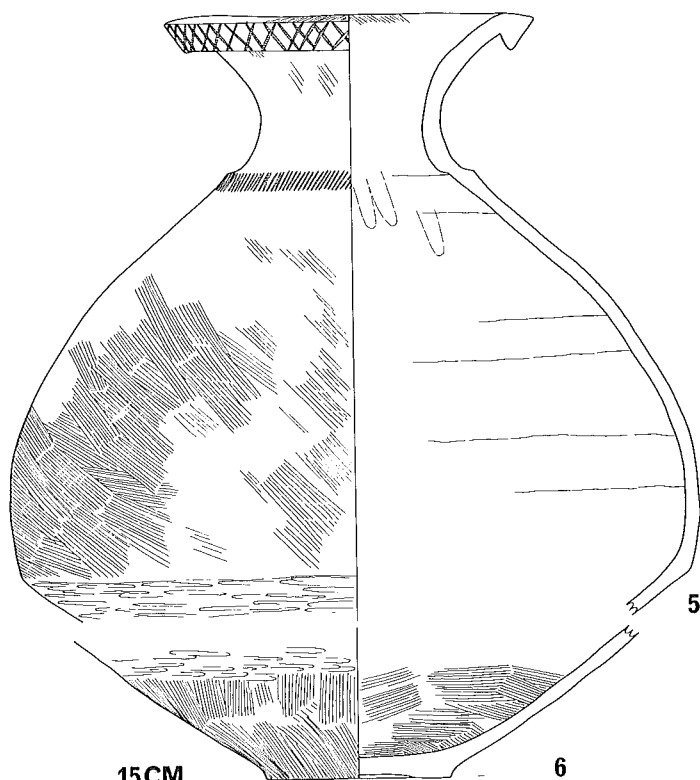
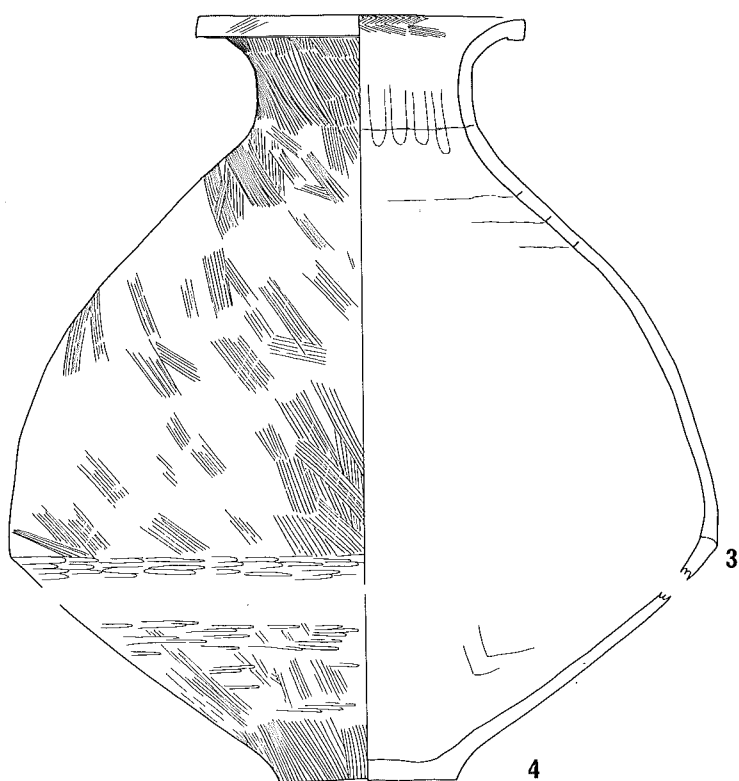
第2節 遺 物

今回の土橋遺跡の発掘調査では、先に述べたように各時期を通じての遺物が出土しているがここでは比較的遺物整理の進んでいる Pit390 の出土遺物を中心にその概略を示した。Pit 390 は現在発掘調査中の7区のはぼ中央でS D89の東側（O-40グリット）に位置する。ベースになるジャリ層は河川の氾濫で運ばれてきたもので確認面から深さ約50cm、長軸1m、短軸80cmの遺構である。遺物整理・図面整理も開始したばかりであるのでここでは資料紹介として遺構からの一括出土品の中の一部をとりあえず載せることとした。

出土品は、壺14個体、甕7個体、高坏2個体、その他2個体の土器が重なり合っていたが、底面からは炭化した木製品も検出されている。1は口径14cm、高さ24.5cm、胴部最大径19.7cmの壺形土器で、口縁部は折り返しで、口縁部内側にはへら状工具による羽状文が施されている。頸部はハケメの後ヨコナデがされ、肩部には小さな段と櫛状工具による羽状の刺突文が施されている。胴部は、最大幅より上はハケメによって、また下部はミガキによって仕上げられている。2は1の土器をひとまわり大きくした壺で口径18cm、高さ29.5cm、胴部最大径24cmを計る。1と異なるところは胴部最大径がやや下がること、底部に木葉痕を残す、口唇部にギザミが施されているなどで、その他の外面調整は1とはほぼ同じである。3、4はやや大型の壺形土器であるが口径17cm、胴部最大径37.2cm、高さは推定で40cm前後で同一個体ではあるが現在の段階では接合できていない。口縁部は折り返しで内側に羽状文が施され、胴部は全体にハケメで調整され最大径より下部はミガキがみられる。これは胴部と底部の接合部分附近である。内側はハケメナデで仕上げられ、また底部には木葉痕を残している。5、6も、3、4とは

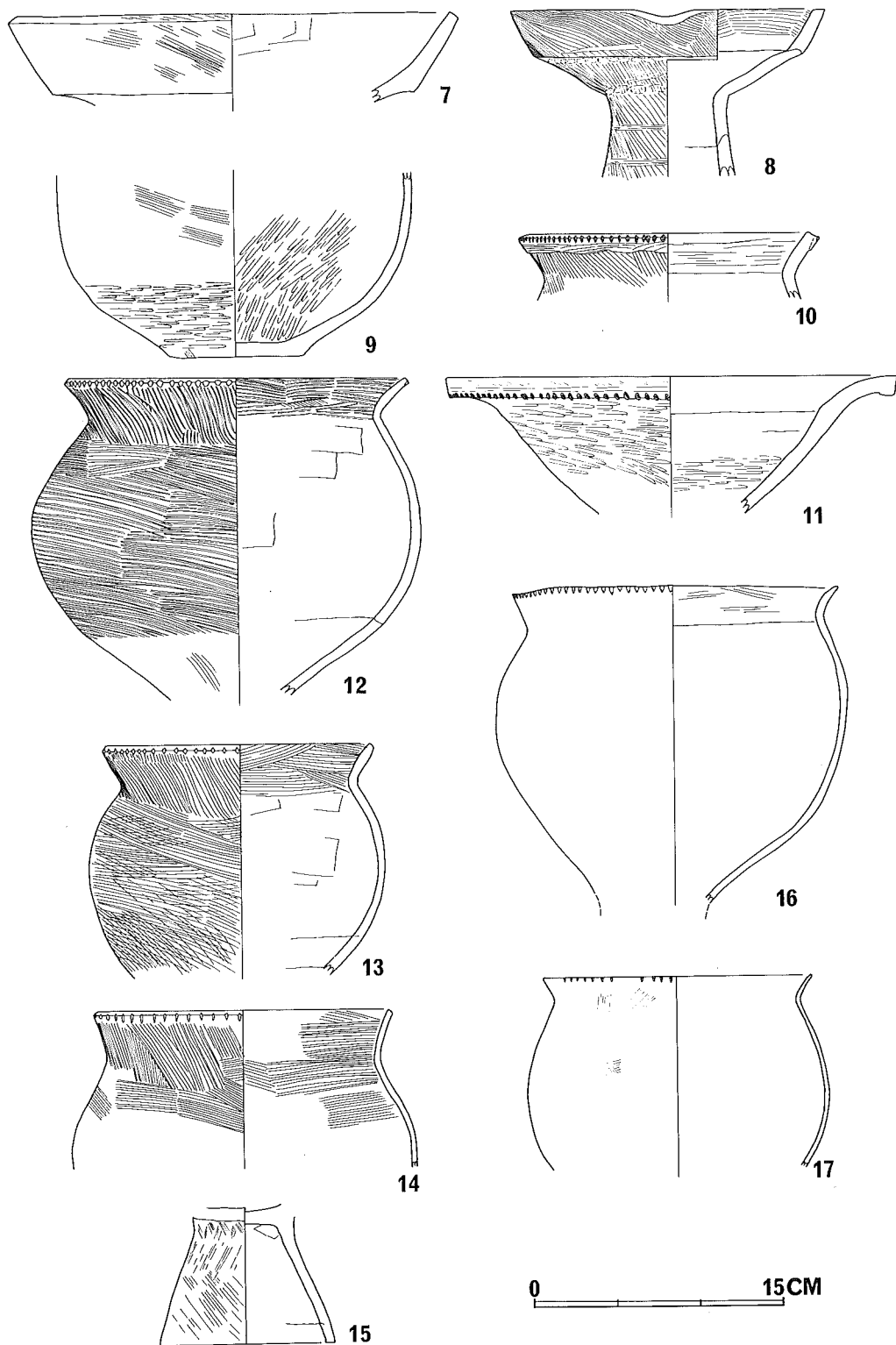


第9図 Pit390 出土土器（その1）



0 15CM

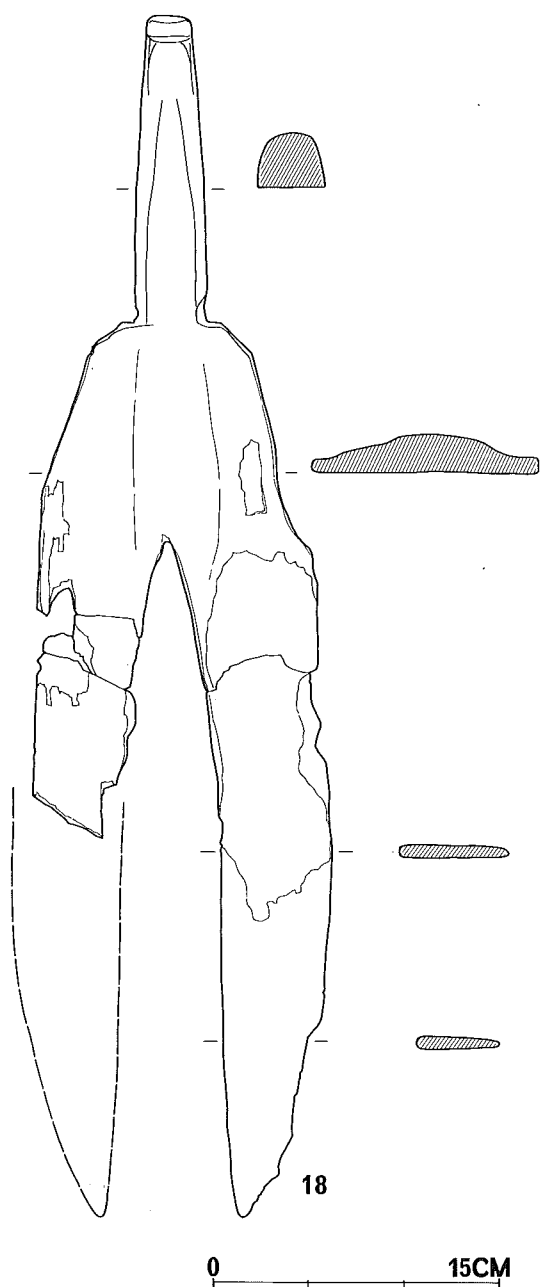
第10図 Pit390 出土土器（その2）



第11図 Pit390 出土土器（その3）

ば同じ大きさの壺形土器で、口径19.3cm、胴部最大径36.2cm、推定の高さ39cmの大型の土器である。口縁は折り返しで、下部に指頭圧痕を残し外面には櫛状工具による斜格子文が施されている。頸部はハケメ→ナデで仕上げられ、肩部には櫛状工具による刺突文が、また胴部は全体にハケメで仕上げられ最大径下に約5cm幅にミガキが残っている。内側はハケメによって調整されている。7は大型の壺の口縁部の小片で復元した口径は27cmである。口縁部は全体にハケメの後ナデで仕上げられている。8は壺口縁部から頸部にかけてで、口径18.5cmの注

ぎ口を持つ土器である。全体に斜方の細かなハケが施され頸部には横ハケが3本みられる。粘土ひもによる接合部はハケ工具で押圧されている。口縁内側はヨコハケがみられる。9は壺の胴部から底部にかけてで胴部最大径21.3cm、底形8cmを計る。外面は全体にハケメを施した後、下部に横方向のミガキを行っている。内側は縦方向のミガキで仕上げられている。10は口唇部にキザミを持つ小型の甕形土器の口縁部である。口径は17cmでくの字に屈曲して胴部につづき、外面は口唇部はヨコナデ、頸部はハケメが施され、内側はハケメ→ナデで仕上げられている。11は口径27cmの高杯の坏部である。内外面ともミガキが基調となって口唇部や内側の一部にナデが施されている。口縁内側にはRL縄文が残されている。12は口径20cm、胴部最大径23.3cmの台付甕で口唇部にキザミを持ち口縁部から縦方向のハケメが、胴部は横方向のハケメが荒く施されている。下部はハケ→ナデの調整となっている。内側はヨコナデで口縁部のみ横方向のハケメである。13・14も同じく台付甕の破片で内外面の調整は12と同じである。15は台付甕の台部でハケ→ナデで仕上げられている。16・17も台付甕であるが胎土が全体的に赤味をお



第12図 SK13出土着柄二又鍬

びて焼きの悪い土器である。内外面とも磨滅がひどく調整ははっきり残っていない。わずかに16では口唇部のキザミと内外のハケが、17では口唇部のキザミと外面のハケメが残るのみである。

18の木製品はS K 13出土の鍬である。二本歯の着柄形式の鍬で実測図・写真とも裏面である。全長63.5cm、最大幅14.5cm、柄との接合部の長さ16cm、柄の幅3.5cm である。歯の全長は47cm、二又に分かれるところまでは先端から35.5cm である。歯の幅は先端附近で3.5～5cm、根本附近では6cm を計る。厚さは歯部で1cm～5mm で柄に近いところでは補強のため2cm とかなり厚くなっている。歯部は内側が厚く外側が薄くなっている。県内のその他の出土例としては藤枝市の宮塚遺跡と磐田市の御殿・二之宮遺跡が代表的である。この着柄鍬には着装できる柄がある。これは宮塚遺跡で鍬に柄が着装された状態で出土して明らかにされた。この報文によると柄と鍬先をワラ状のもので密着させ、さらに幅0.5cm 程の蔓状の樹皮によって両者を縛り合わせる方法とのことである。土橋遺跡の鍬先の柄の部分の付け根に樹皮によって縛った痕跡が残り、柄の頭に削り出してつくられた突起をもつ。

第3章 ま と め

第1次調査、第2次調査を終了した時点での報告であるので、もう少し突っこんだ内容にしなければいけないのであろうが現在発掘中でこの後第3次調査、第4次調査で発掘対象面積の70%以上を残しているため調査の概略を記するにとどまった。詳しい内容については3次・4次調査終了後に正式報告書が作成されるのでそれを参照されたい。今回の調査結果及び3次・4次調査の課題について記すると次のとおりである。

- (1) 当初の予想では土橋遺跡は北側の鶴松遺跡、徳光遺跡と同様弥生時代中期～後期にかけての集落跡と水田跡が検出されるようになっていたが、調査の結果弥生時代後期の溝状遺構、土壇、Pit が検出されたがその性格については不明な点が多い。
- (2) S字状口縁付甕と二重口縁壺と丸底埴などを中心とする古式土師器を出土する溝状遺構と土壇があり、これからの調査でこれらの一括資料が期待できる。
- (3) 低湿地のため木製品の残存状態がよく木製農具や種子の検出が予想される。
- (4) 奈良時代末～平安時代にかけての墨書土器が約40点出土している。「里人」「里當」「上人」「丸」などの文字や墨痕がある。墨書土器では市内の坂尻遺跡の出土品には及ばないが稲荷領家遺跡とともに3例目の出土である。」
- (5) 中世の遺構からの出土品が若干あり、現在資料の少ない15～16世紀代の遺物が出はじめており土器以外の遺物（木製品など）も含まれている。
- (6) 江戸時代の池状遺構（S X 1）から陶器、木製品などの遺物とともに犬遺体が1点出土した。早稲田大学の金子浩昌先生によるとこの時期の資料はたいへん少なく地方における江戸期の貴重な資料とのことである。また弥生時代後期の犬遺体も1点土壇から埋葬された状態で検出されている。

〔参考文献・引用文献〕

- 1981 磐田市教育委員会 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 1981 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書―坂尻遺跡第1次調査報告書―』
- 1981 藤枝市教育委員会 『国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 宮塚遺跡 潮城跡』
- 1982 袋井市教育委員会 『鶴松遺跡』
- 1982 磐田市教育委員会 『野際遺跡発掘調査概報』
- 1982 磐田市教育委員会 『新豊院山墳墓群』
- 1982 浅羽町教育委員会 『青木遺跡・馬場第1遺跡・西立遺跡』
- 1982 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報―坂尻遺跡第2次調査―』
- 1982 袋井市教育委員会 『昭和57年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その2 報告書―土橋遺跡第1次発掘調査―』
- 1983 袋井市役所 『袋井市史―通史編―』

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その3概報

土橋遺跡—第2次調査—

1983年3月31日

編集・発行 静岡県袋井市教育委員会 ©
袋井市国本3070の1

印刷所 株式会社 開明堂
浜松市中沢町1番1号

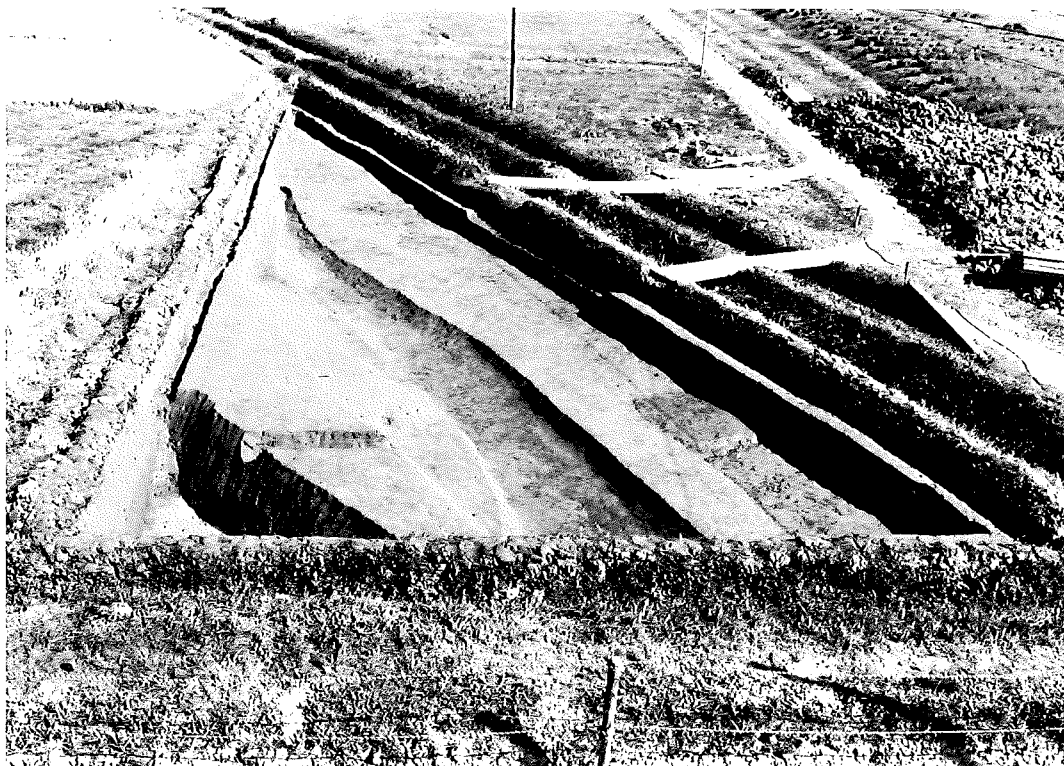


土橋遺跡遠景（磐田原台地より）



土橋遺跡遠景（国道1号線より）

図版 第2



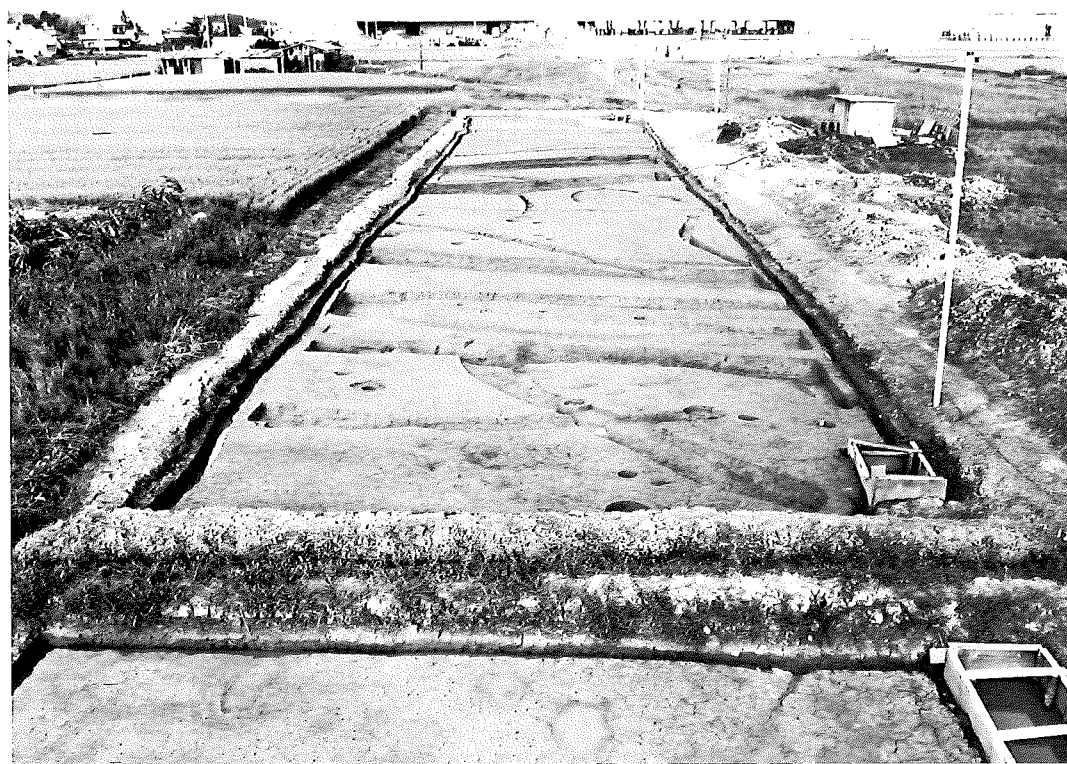
1区 完掘写真（西より）



1区 SD22完掘写真



2区 完掘写真（東より）

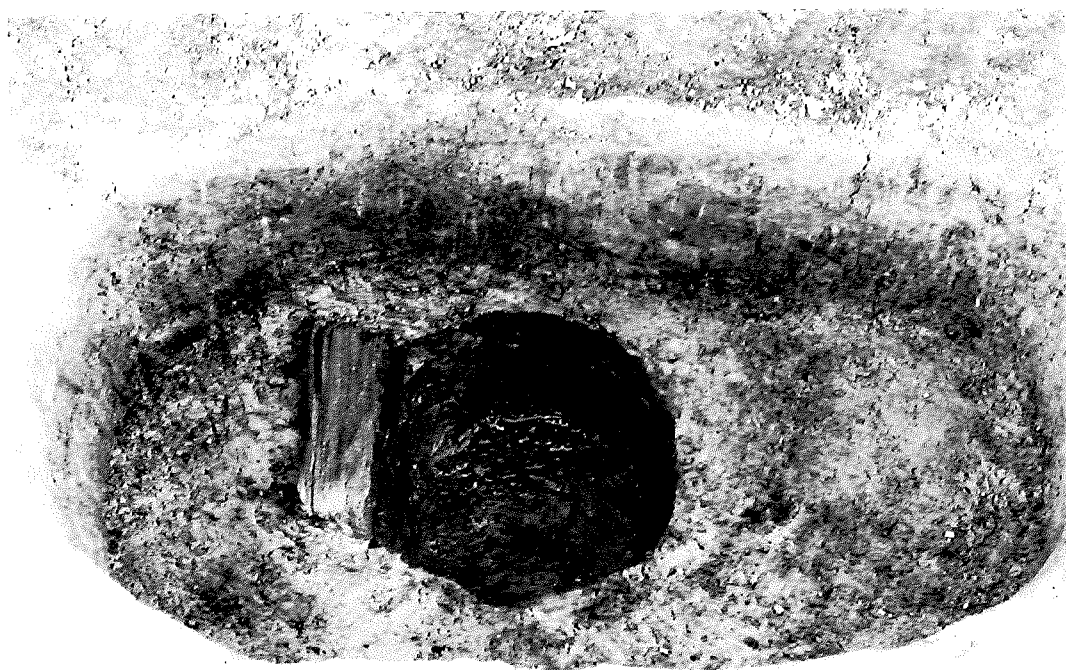


2区 完掘写真（西より）

図版 第4



2区 SB1 掘立柱建物遺構（南より）



2区 SB1 のPit 2 完掘写真



2区 SD4, SD8完掘写真



2区 SD7完掘写真



2区 SD29, SD21, SD3, SD2, SD5完掘写真



2区 SB2掘立柱建物遺構(南より)

図版 第7



3区 完掘写真（西より）



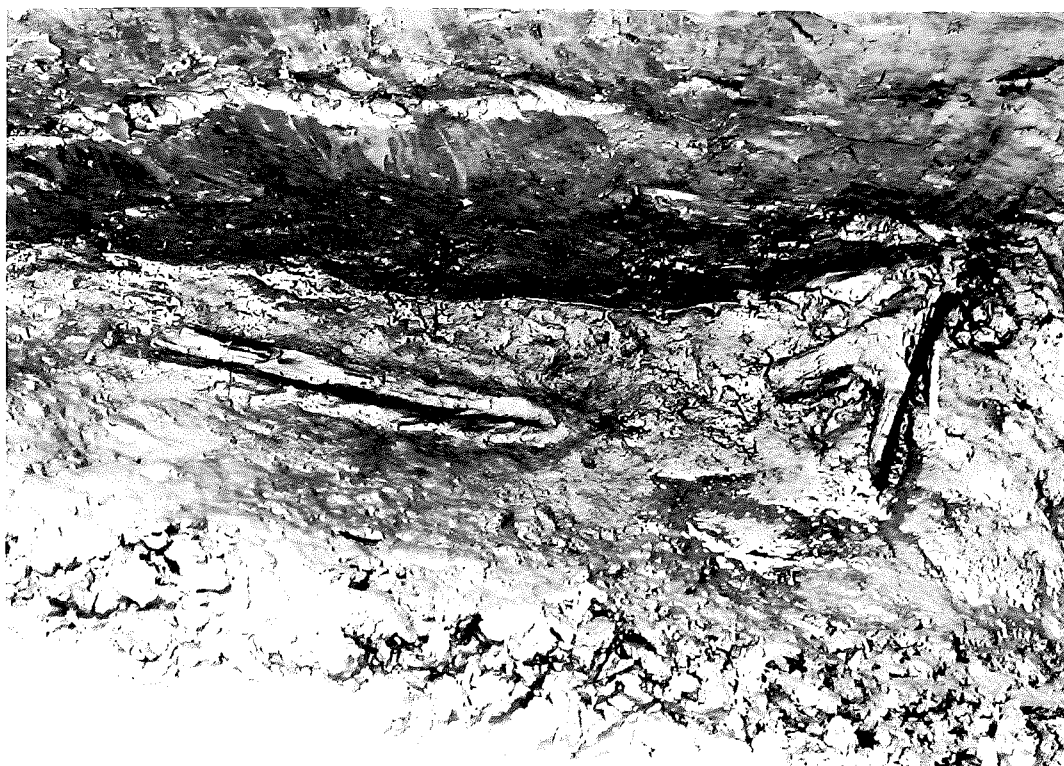
3区 完掘写真（東より）



3区 SI 1, SI 2, SI 3, SD32等重複状況



3区 SI 4 遺物出土状態



3区 SI3 着柄鋤の柄出土



3区 SI2 遺物出土状態



3区 SB4完掘写真



3区 SB3完掘写真



3区 SK3 遺物出土状態



3区 SK3 土層堆積状態



4区 完掘写真（東より）



4区 中央完掘写真



4区 SD39完掘写真



4区 SD45完掘写真



4区西側 SD44周辺完掘写真



4区 SK13完掘写真



4区 SK9 遺物出土状態



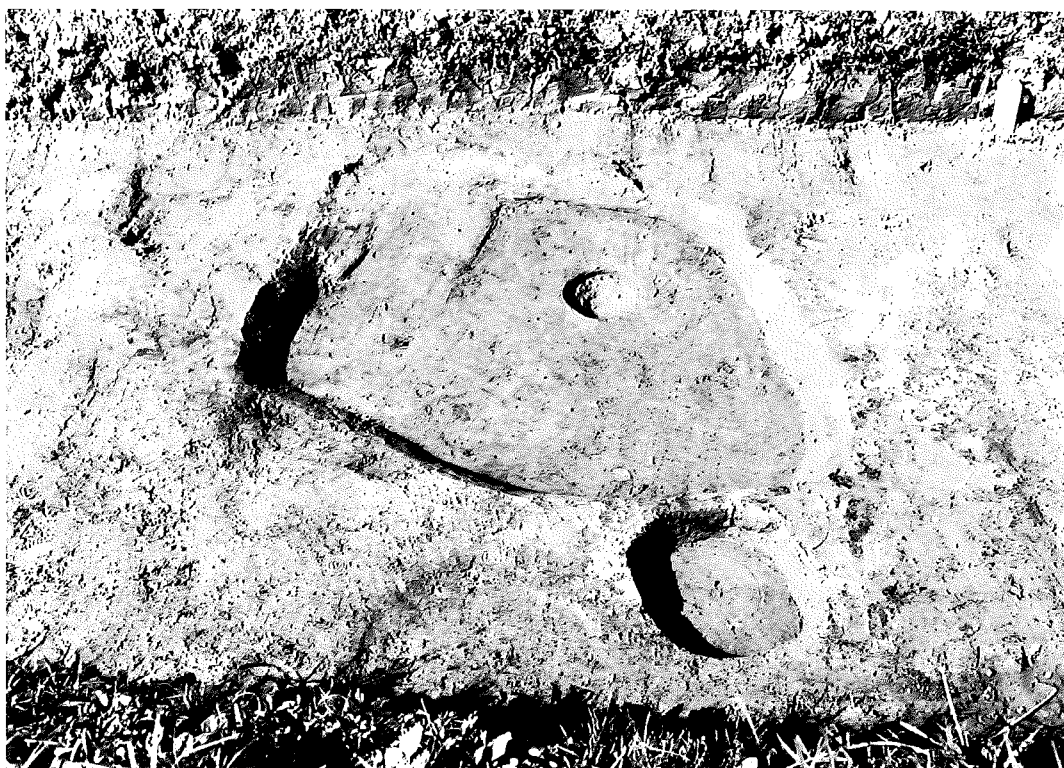
4区 土壙完掘写真



5区 完掘写真（東より）



5区 完掘写真（西より）



5区 SK14, Pit185完掘写真



5区 SK15遺物出土状態



6区 完掘写真（北より）



6区 完掘写真（西より）



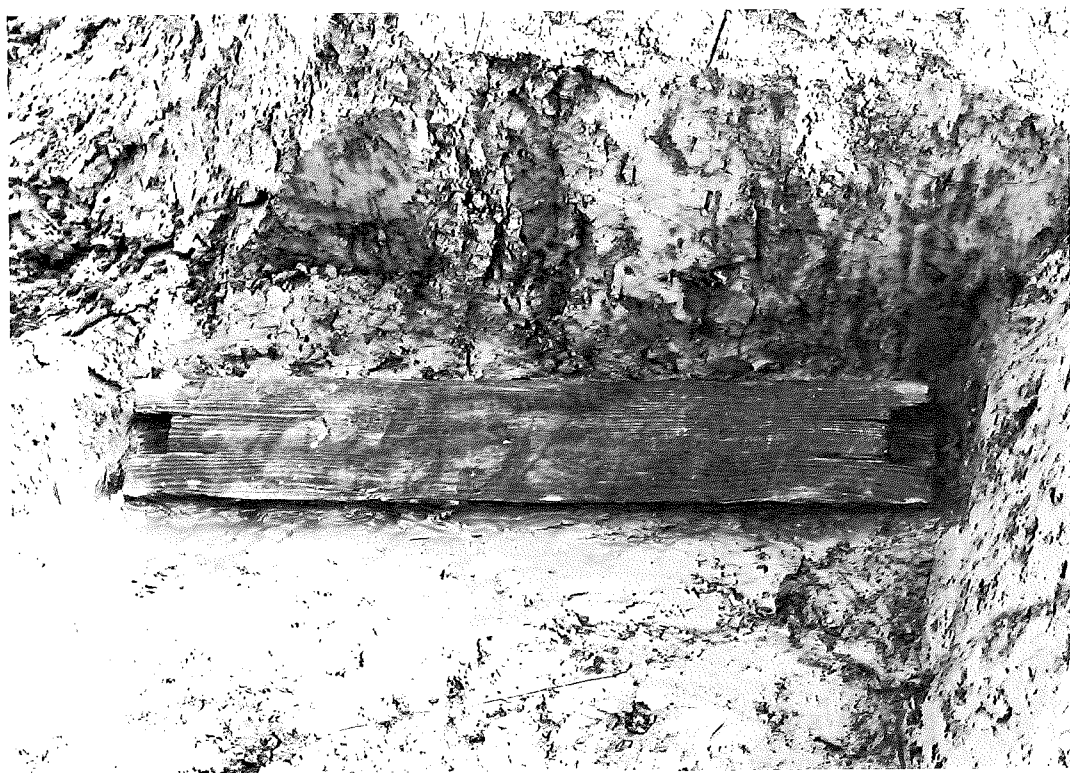
6区 SX1完掘写真



6区 SX1内拡大写真



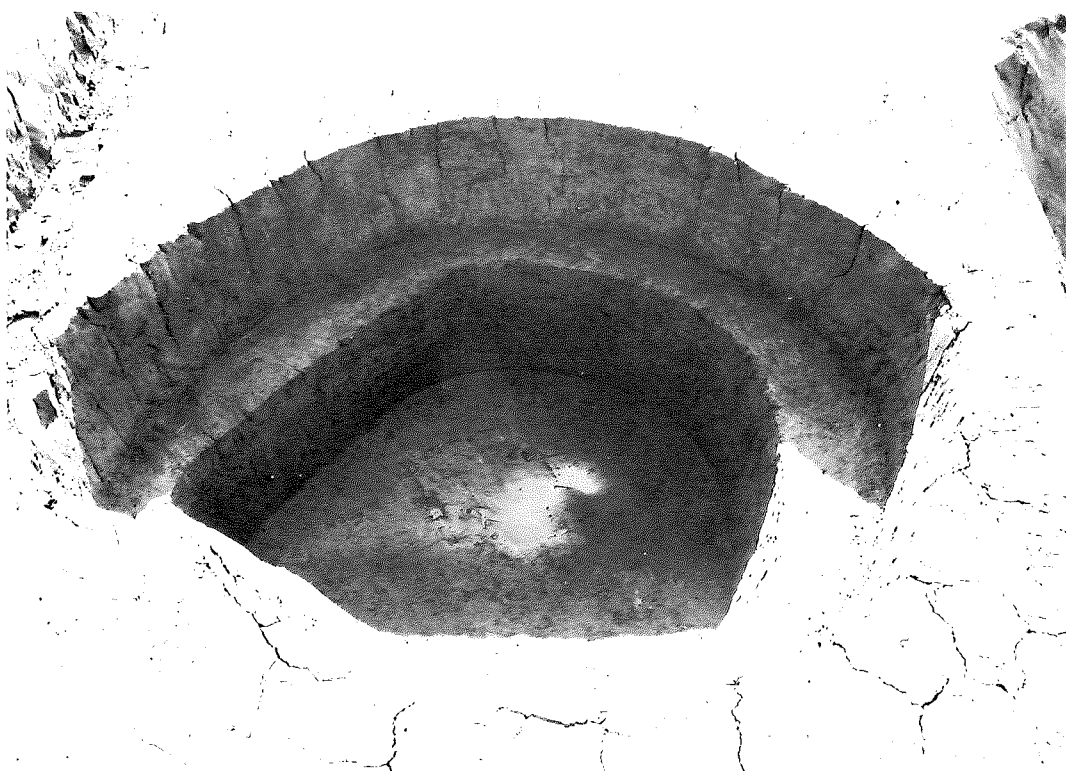
6区 SX1 底面出土犬遺体検出状態



6区 SX1 出土木製品



6区 SK28 (北より)



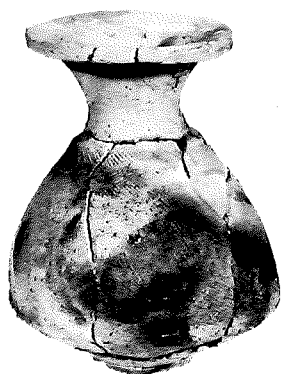
6区 SK24 (北より)



6区 SD60 (北より)



6区 SD51 (東より)



1



2



3



4



5



6



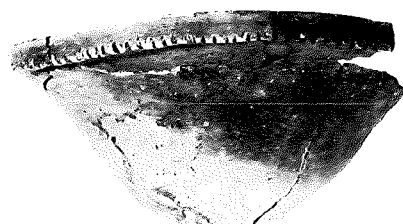
7



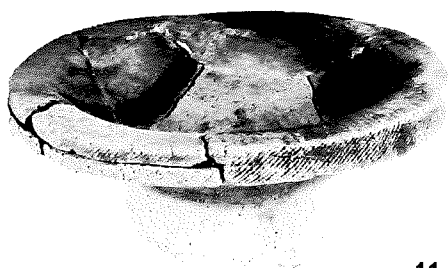
8



9



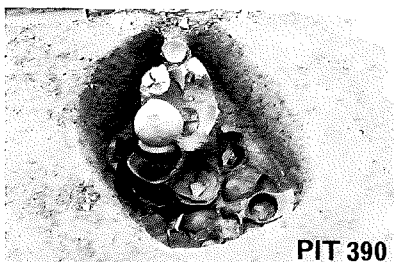
10



11



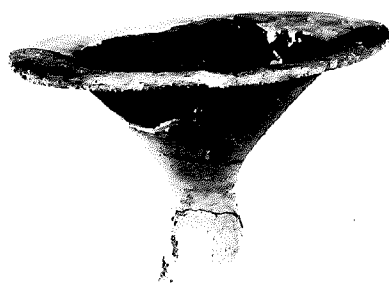
12



PIT 390



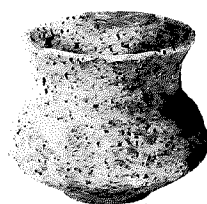
13



14



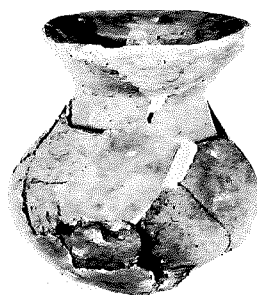
15



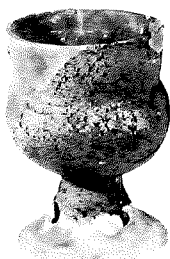
16



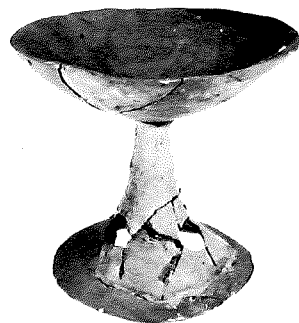
17



18



19



20



21



22



23



24